

過ぎたるは

昭和二十六年の秋、それまでNHKしかなかったラジオ放送に、新しく民間放送が二局参入して中波の電波を出し始めた。岡山の新制中学二年生だった私は、真空管が三本しかないウチのラジオで本場に「民間放送」なるものが聴こえるのかと心配だったが、棚の上に載せられたラジオのダイヤルを、踏み台に乗って慎重に回すと、意外に簡単に、聞きなれたNHK岡山（JOKK）とは別の放送が聴こえてきた。喋り方が何か違っていただけだと思っけれど、どこがどう違っていたのか実は憶えてはいない。違いが良く判ってとても新鮮に聴こえたのは時報で、NHKのプ、プ、プ、ポーンと違って鉄琴の澄んだ音色が延々十秒程も軽快なメロディを奏でたあと、チーンと美しく鐘が鳴って収まるのである。そして時報のたびに「新日本放送」と名乗った。

後年、散々てこずりながらパソコンがインターネットに接続出来た時、似た体験としてこの時の嬉しさを思い出したけれど、比べてみればこの民放初体験の感動の方が遙かに大きい。なにしろ大げさに言うところまさに新時代来るといふ感じがしたものである。民放の開局は各地で一度に百花斉放というわけではなかったので、暫くの間はラジオに付ききりで新局を探した。ダイヤルで「追っかけ」をやっていると、同じ声、同じ番組を囁いていたあちこちのNHKの地方局が、ローカルニュースの時間になって初めて、それぞれが遠方の、別々の放送局であることが判る。それが面白くて、ひどい雑音の中から遠いローカル局の微かな電波を探すのが楽しみだった。

NHKの他に進駐軍放送のおそろしく早口の英語はどこでも聞こえていた。勿論何を言っているのか判る筈もなかったが、格好の好い「フアーライーストネットワークトウキョウ」のオチだけはすぐに覚えた。他にも朝鮮語や中国語らしい放送も無数に飛び交っていて、井戸の中の蛙だった田舎の中学生にぼんやりとはあるが「外の世界」を実感させた。その年は朝鮮戦争のさなかでもあり、九月のサンフランシスコ講和で連合軍の6年にわたる日本占領が終わるといっわば節目の年でもあった。

年表を眺めてみると同じ年の二月、NHKが後楽園球場から日本橋三越へ初のテレビ実況中継を試みたところ。球場からだから野球試合の実況だったのであろう。本放映は二年後だったらしいが、こちらがやっとラジオを発見したというのに実験とはいえもうテレビ中継が試みられているのには驚いた。

テレビ放映開始の頃の受像機の値段がどれほどのものだったのかまるで知らないが、当初はどここの家でもおいそれとは買える物ではなかったらしく、プロレス中継を見るために黒山のように「街頭テレビ」に群がっている人々の写真は、今でも回顧番組でよく見せられ

る。喫茶店の入り口に「テレビ受像中」と客寄せの札が架けられていたのがつい昨日のことのようである。私にしたところで、鉄腕稲尾を擁する黄金時代の西鉄が巨人を圧倒した日本シリーズを、それも稲尾自身がホームランを打って勝った試合を医学部正門前の喫茶店のテレビで見た覚えがある。朋輩たちと解剖実習室を脱出してちよっと息抜きをしていたのである。

父親が経済紙の地方支局長、母親が日赤看護婦という私の家に白黒テレビが現れたのはそれよりずっと後、昭和三十四年頃だった。私はボート部の艇庫に棲みついていたが、夏の合宿から暫くぶりに帰宅してみたらそれが四本脚の台座に載ってドンと居間を占領していて六畳間が狭く見えた。ブラウン管の前には厚織のカバーが垂れており、いよいよテレビを見る時は舞台の緞帳よろしくそれを跳ね上げるのであった。そういえば電話にも布カバーを掛けることを誰が思いついたのか、どこのお宅でも卓上型の黒電話には大抵ダイヤルの所を丸くくり抜いた織物を着せてあったものである。一見異質に見える工業製品をなんとか和風の暮らしに馴染ませようという、まるで見当違いなアイデアだったが、これで稼いだ人もいたわけだ。

受像機には喫茶店などで既に免疫が出来ていて、ガチャとダイヤルを回せば白黒ではあるが動く映像が写る仕掛けそのものはもう珍しくはなかったが、その後ニュースや娯楽の中枢になる、決定版ともいべき新メディアが遂に我が家にも登場して来たという感動があったのか無かったのか、はつきりしない。いくばくかの感想があったにせよ、往時茫茫四十年、以後テレビにどっぷり漬かって暮らして来たために、そんなものは感情の下層にすっかり塗り込められてしまったのかも知れない。

カラー受像機を自分で買ったのも随分遅くて昭和五十年以後と思うけれど、既に感性が鈍くなっていてどこでどうしたという単純な記憶も無い。遙け昔、小学校五年の時、先生に引率されて行った岡山駅前中筋の映画館でアメリカ映画「ロビンフッドの冒険」を見たのはよく覚えているのである。この初めての「総天然色」にほぼ感心したと見えて毒々しい程の赤、ペンキ塗りの様な青空が眼前になお鮮やかである。いまも語り草になっている東京オリンピック開会式の日の「抜けるような青空」もそれに映える日の丸も十四インチ白黒の小さな画面で見た。

いま鎌倉ケーブルテレビでは三十以上のチャンネルを見ることが出来るというがいったいどれだけの人がこの龐大な映像を見ているのだろう。現状でも私には過剰としか思えないのに、いずれデジタルになって、どうとやらすると数百チャンネルも可能なのだそうだ。ラジオにしてもFMだ、短波だと入り乱れて無慮数百局、それぞれ克明に作られた秒単位の番組表に従って終日終夜、語り、喚き、鳴らし続ける。生活と生存の為に本当に必要な情報はほんの一握りなのにどうでもよいガラクタ情報が飛び交い、無意味な電波が地球を覆い尽くす。その上今度は周回衛星を何十個も打ち上げて、携帯電話ひとつで瞬時に地球上のどここの地点でも話が出来るようにするという。もう勝手にしろである。

私もおだてられてインターネットぐらいまでは何とかくつついて来たけれど、小さなボタンを忙しく押して無用の用事を作り出す「ケータイ」から以後は、もうやーめたである。

「援助交際」とか何とかいろいろ面白そうで、実はすこし羨ましくはあるけれど。

暮らしを便利に、豊かにすべき産業技術が大量消費社会の中では富を偏在させ、周辺をガラクタだらけにし、宇宙船地球号全体を汚染して、人類ばかりでなく他の乗組員の生存をも危うくしている。なるべくならこれ以上は付き合いたくない。

しかし、私が地球の環境汚染を顧慮してやたら新しいものに跳び付くことはやめたというのはちょっと格好良すぎる言い草で、実はアタマも指先も新しい技術に追いついて行けなくなり、そして何よりも、続出するトラブルなどものともしない好奇心も衰えて来たということであるうか。

(神庫 第四十三号 二〇〇三年三月)